

## 巻頭の辞

神戸市立病院紀要は本誌が記念すべき第50巻となります。長きにわたり神戸市民病院群の発展と紀要の刊行にご尽力をいただきました関係の方々に深い敬意を表します。

さて、2011年（平成23年）は神戸市民病院群にとっては二つの出来事において長く記憶に残る年であるように思います。

一つは3月11日起きた東日本大震災であり、神戸市民病院群はその医療支援において大きな役割を果たしました。3月12日には中央市民病院が、いち早く現地へDMATを派遣しました。引き続き中央市民病院、西市民病院、西神戸医療センターがそれぞれ、医師、看護師、薬剤師、事務職員からなるチームを編成し、宮城県の南三陸町と仙台市の若葉地区へ合計17チームを派遣しました。阪神・淡路大震災を体験し、支援のありがたさ、あり方を身にしみて感じている市民病院群チームは、被災者に対するきめ細かな対応で、非常に高い評価をいただいております。改めてチームのメンバーの皆さんに厚く御礼申し上げます。

二つ目に中央市民病院の移転が挙げられます。病床数を減じての移転ですが、新しい病院では救急病床を30床より50床に増床し、救急医療の充実を図ったほか、心疾患、脳卒中、癌、生育医療などに関する高度専門医療センターを設置するとともに最新の医療機器を導入し、神戸圏域の基幹病院として地域住民のニーズに応えるより充実したものになりました。先端医療センターの隣への移転であり、また、近い将来には近隣に低侵襲がん治療センターなどの設立も予定されており、より専門化した機能、役割の分担が計られることとなります。

災害に対する備えにしろ、日常の診療にしろ、病院同士の連携が非常に重要視される今日です。神戸市関連の5病院では、今回の震災を機にそれぞれの病院、独法本部、保健福祉局の幹部が集まり連携のあり方を議論することになりました。本誌がその一助になることを願っております。

西神戸医療センター

片山和明